

平成30年度 国語部会研究主題

1 研究主題

実生活に生きて働く言語能力を育成する国語科学習指導 —表現することを通して、思いや考えを深める単元の構想と展開—

2 研究主題設定の理由とその考え方

(1) 主題について

① 社会的背景

グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造は大きく急速に変化しており、未来予測が困難な時代となっている。これからの時代を生きる子供たちには、種々の社会変化やそこから引き起こされる様々な問題に柔軟に対応していく力が求められている。

② 「実生活に生きて働く言語能力を育成する」ことの必要性

子供たちが社会や世界と関わり合い、現在あるいは将来の生活に起こるであろう諸問題を解決していくためには、生涯にわたって活用できる概念を獲得したり、情報や既存の知識から自分の考えを構築したり、自分の心理や感情を意識的に統制したりするための言語能力を身に付ける必要がある。本会では、このような言語能力を「実生活に生きて働く言語能力」と呼び、平成28年度から「実生活に生きて働く言語能力を育成する国語科学習指導」を研究主題に掲げ、単元学習の理念を生かした国語科学習指導を基本に、子供一人一人の「実生活に生きて働く言語能力」の育成に取り組んできた。本研究では、言語生活全体を通して、このような言語能力を子供一人一人に培うことを目指すことから、「国語科授業」ではなく「国語科学習指導」とした。

③ 本県における研究の成果

第28回四国国語教育研究大会の会場校である東みよし町立三庄小学校では、思考力の育成を中核とし、「書く活動」を効果的に取り入れた単元の構想と展開が研究された。本研究の主たる成果として、意図的・計画的に位置付けられた「書く活動」は、子供の思考の活性化を促し、「言葉による見方・考え方」を働かせ、自分の考えを明確にしたり思考を深めたりすることに効果的であることが実証された。また、「書く活動」を繰り返していくことは、子供一人一人の思考力や書く力を高めるだけでなく、書くことによって思考したり表現したりする習慣を身に付けることに大きく寄与することが実証された。会場校からは、書くことの習慣を実生活に役立てる子供の姿が報告されている。

(2) 副主題について

① 思いや考えを深めるために

国語科においては、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり問い直したりすること、すなわち「言葉による見方・考え方」を働かせることが、思いや考えを深めるため—深い学びを実現するため—の鍵となる。子供が思いや考えを深めるためには、理解し表現した言葉を、これまでに獲得してきた言語能力をもとに問い直し、理解し直したり表現し直したりすることが重要である。また、思考を深めたり活性化させたりしていくために、語彙を豊かにすることも必要となる。

○中央教育審議会
教育課程部会「言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ」平成28年8月26日

・新たな知識の習得は基本的に言葉を通じてなされている。また、言葉を使って知識と知識の間のつながりを捉えて、構造化することが、生涯にわたって活用できる概念の理解につながる。

・思考・判断・表現するプロセスにおいては、情報を読み取って吟味したり、既存の知識と関連付けながら自分の考えを構築したり、目的に応じて表現したりすることになるが、いずれにおいても言葉が重要な役割を果たしている。

・子供自身が、自分の心理や感情を意識し統制していく力や、自らの思考のプロセスを客観的に捉える力の獲得は、他者からの言語による働き掛けや思考のプロセスの言語化を通じて行われる。

② 「表現すること」の有効性

自分の思いや考えを他者に向けて表現するとき、あるいは他者の思いや考えを受けて表現するとき、子供は内面的に活性化され、「認識から思考へ」「思考から表現へ」という言語能力を構成する資質・能力の働く過程が生じる。この過程において、例えば、相手に正確に伝わるように言葉を吟味する、内容を補足・精緻化する、意見に対する根拠や理由を明確にする、構成や表現形式を検討するなど、様々な言語能力を構成する資質・能力が働く。このとき、教師が適切な指導・支援を講じることにより、子供一人一人の「言葉による見方・考え方」を磨くことが可能となる。

このことから、自分の思いや考えを表現する過程において、「言葉による見方・考え方」を働かせ、思いや考えをさらに深めることができるようになる有効性を踏まえて、「表現することを通して、思いや考えを深める」とした。

③ 単元の構想と展開

「実生活に生きて働く言語能力」を育成するためには、子供の興味・関心に根ざす話題をめぐって組織されるひとまとまりの価値ある活動（＝単元）を構想し、学習課題の解決を目指して学習者が意欲的・主体的に言語活動を展開することが効果的である。これまでの研究の成果から明らかとなった単元の要素を以下に示す。

- ・単元を通じた指導目標と子供の活動目標が明確に設定されていること
- ・身に付けるべき言語能力を着実に育成することができること
- ・実生活に生きる言語活動が単元に位置付けられていること
- ・子供の興味・関心に根ざし、探究することができること
- ・教材等の複数化・個別化が図られ、子供の主体性を重視していること
- ・展開の過程に、他者と関わり合う交流の場が位置付けられていること
- ・学習の自覚化を図っていること
- ・子供の発達に応じ、教育課程全体を見通した言語活動が位置付けられていること

これらの要素の、いくつか、あるいは、全てを有する単元が、「実生活に生きて働く言語能力」を育成することのできる単元であると考え。今年度は、平成29年度の研究の成果と課題を踏まえた上で、「表現することを通して、思いや考えを深める単元の構想と展開」について研究を進めていくこととする。

3 研究の内容と方法

(1) 「表現することを通して、思いや考えを深める単元の構想と展開」に関する研究

① 子供が思いや考えを表現したくなるために

子供が自分の思いや考えを表現したくなるように、教師は、表現する場をつくり、表現すべき内容を育て、表現の技能・方法を精選し指導するとともに、表現することへの意欲を喚起していかなければならない。

表現する場をつくるためには、事前の指導によって子供の興味・関心を育み、一人一人が本気で追究したくなる学習課題を設定し、他者と共有する必要がある。共有された学習課題の解決の過程において、他者の思いや考えを知りたい、自分の思いや考えを他者に表現したいという意欲が高まり、必然性を帯びた交流の場を単元に位置付けることができるようになる。

学習課題を設定することにより、子供一人一人の心の内に表現したい内容は生ま

○中央教育審議会教育課程部会「言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ」平成28年8月26日)資料1「言語能力を構成する資質・能力」、資料2「言語能力を構成する資質・能力が働く過程のイメージ」参照

○本会は、経験主義の「単元学習」を方法ではなく理念として捉え、系統主義との融合を図ろうと、これまで「単元学習の理念を生かした指導」に取り組んできた。

○子供の実態や教師のねらいに応じて、「単元学習の理念を生かした指導」を意図的・計画的に繰り返すことが、授業改善への確かな道筋になると考えられる。大単元と小単元のそれぞれの利点を生かしながら、年間指導計画を立てることが必要である。

○事前の指導として、関連図書を読み聞かせたり、言語活動の経験を共有したりすることが挙げられる。学習内容と学習活動の両方に関わる興味・関心や問題意識を育てる必要がある。

れるが、教師はこれを表現すべき内容へと高めていく必要がある。例えば、個別の「学習の手引き」を作成し指導することにより、「言葉による見方・考え方」を働かせながら、自分の思いや考えを学習課題の解決に迫るものへと深めていくことが考えられる。話し合いにおいては、論点が焦点化されていくように内容を絞ったり、多角的・多面的に考えられるように内容を広げたりする手立てが求められる。

しかしながら、子供の内面に表現すべき内容を育てても、表現する技能・方法を伴わなければ表出されることは難しい。そこで、子供の発達に応じた表現の技能・方法を精選するとともに、指導していく必要がある。

② 表現することを通して、思いや考えを深めるために

表現することを通して、思いや考えを深めることができるようにするために、単元を構想・展開する際には、次の点に留意したい。

ア 単元の構想段階

事前の指導によって子供の興味・関心や問題意識を育てるとともに、子供一人一人の思いや考えを表現することへの意欲を喚起する。また、子供の実態から、表現の方法を精選し、子供の実態に応じた評価を具体的に設定しておく。

イ 単元の導入段階

具体的な表現のモデルを提示するなど子供が単元のゴールを明確に意識できるようにする。

ウ 単元の展開段階

学習課題の解決の過程に交流の場を位置付け、表現することを通して、思いや考えを深めたり新たな問いを共有したりできるようにする。その際、他者を意識して、文章を推敲したり発話を調整したりするなどの表現の技能・方法を指導していく。表現力が高まることにより、内容も深まっていくはずである。

エ 単元の終末段階

「学習の記録」を活用しながら、自分の学習（表現）過程を振り返り、自己の学びを説明したり評価したりすることを通して、子供一人一人が達成感や有用感を味わうことができるようにする。

○平成28年度の研究において成果が得られた「書く活動」を効果的に取り入れたい。書くことによって、子供は自分の思いや考えを明確にし、自信をもって発言することができるようになる。

○「単元のゴールを明確に意識できる」とは、単元のゴールが具体的なモデルとして提示されたり、子供が自己評価できるように観点が具体化されたりすることである。ただし、この観点は子供にとっての観点である。

(2) 年間指導・評価計画に関する研究

① 子供の発達に応じた言語活動を位置付けた年間指導・評価計画

言語能力を体系的に把握し、意図的・系統的に育成していく上で、6年間を見通した年間指導・評価計画は欠かせないものである。この年間指導・評価計画に、子供の発達に応じた言語活動を位置付けることにより、無理なく、効果的に「実生活に生きて働く言語能力」を育成することが可能となる。

言語活動を選定する際には、他教科等との関連を考慮したい。他教科等との関連を図ることで、単元に位置付けた言語活動に必然性を持たせることができる。子供が必然性を帯びた言語活動に取り組むときにこそ、「実生活に生きて働く言語能力」を育成することができるようになる。

② 「目標設定—指導—評価」の一体化

子供一人一人に応じた言語能力を的確に育成するためには、単元を構想・展開していく上で、「目標設定—指導—評価」が効果的に結び付けられる必要がある。

例えば、教師の指導目標を、行動目標の形でいくつか提示し、子供一人一人の学習状況を明確に評価する。そして、子供一人一人の学習状況から、それぞれのつまづきをどのように克服させていくか、あるいは、どのように伸ばしていくかなどの

○国語科における言語活動を他教科、あるいは日常生活と関連付けることにより、生きて働く言語能力が育つ。

○学んだ結果を評価するとともに、子供の言葉の生活や学びの過程、学ぼうとする意欲や態度を継続的に評価することが大切である。評価が子供一人一人の意欲を高め、言語能力を身に付ける手立ての一つとなる。

個に応じた指導・支援を計画し実行することが、「目標設定—指導—評価」の一体化を図ることの例として挙げられる。さらに、これまでの学習過程で得られた「評価」に基づいて、子供一人一人の個性や能力に応じた「目標」を設定した単元を新たに構想・展開することにより、子供一人一人に即応した国語科学習指導を創造することができるようになる。

(3) 日々の国語科学習指導に関する研究

① 読書指導の改善・充実

情報をただ受け取るだけの読書でなく、読んだことから自分の求めている情報を発見したり、読むことで自分の中に新たな思いや考えを作り出したりする読書へと高めていきたい。そのためには、目的や場合に応じて読む本を選んだり、その本の読み方を選択したりする活動に取り組みさせることが考えられる。単元に並行読書を位置付ける場合にも、形式的にならず、読書することへの必要感を常に子供一人一人に持たせたい。

○「読書生活の指導」に取り組む際には、学校と公立図書館との連携・協働を図りたい。また、新聞の活用を含めた読書生活の改善・充実に取り組みたい。

② 「作文読本」の効果的な活用

自分の思いや考えを書くことによって表現する力は、今後ますます求められる。そこで、日々の国語科学習指導に「作文読本」を活用することが考えられる。

「作文の広場」に作品を投稿することは書くための強い動機付けとなり、作品が掲載されることは書くことに対する自信につながる。また、「練習」の例文や「作文の広場」に掲載された同学年の作文は、格好のモデルとなり、書く技能の向上に効果がある。さらに、「作文の広場」に掲載された作文を読むことを通して、読み手としての思いや考えを深めることも意義深い。

③ 「学習の手引き」の作成と活用

単元を構想・展開する上で、子供の実態や目的に応じた「学習の手引き」を作成し、活用していくことは欠かせない。「学習の手引き」は、子供一人一人が自ずと「言葉による見方・考え方」を働かせ、思いや考えを深めることの手助けとなる。

例えば、書くことによって思いや考えを深めることを目的とする「学習の手引き」として、「書き出しや観点を示した手引き」が考えられる。作成する際は、子供が自分の思いや考えを発掘したり、とらえたり、整理したり、まとめたりすることができるように例示する言葉を工夫する必要がある。また、話すことによって思いや考えを深めることを目的とする「学習の手引き」として、「話し合いの台本型手引き」が考えられる。作成する際は、話し合いの進め方を読んで理解するだけのものに留めず、多角的・多面的な見方による意見や、相手の意見を受けて自分の思いや考えを深めていく思考過程を意図的に配置していくなどの工夫が必要となる。

○子供一人一人が困らないように、何を、どのようにすればよいかを示したり、言葉や表現に注目することができるような観点を示したりするなど、さまざまな手引きが考えられる。

④ 「学習の記録」の効果的な活用

子供が自らの学びの過程を振り返り、自己評価していくことにより、学びを自覚することも重要である。そこで、「学習の記録」を活用することを学習活動の一つとして位置付ける。

「学習の記録」には、学習の手引きや成果物、振り返りなどの子供によって書き残されたものと、音声データや映像などのICT機器によって蓄積されたものとがある。この「学習の記録」を活用する際には、教師が子供の学びにどのような価値があるのかを認め、子供がその意味に気付いていくことができるように対話的な関わりを心掛ける。また、話し合いの様相を撮影した「学習の記録」と「話し合いの台本型手引き」とを合わせて活用するなどの効果的な活用を考えたい。